The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	災害復興のアクションリサーチ
Author(s)	宮本, 匠
Citation	大阪大学, 2012, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/59322
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【4】

氏　　名	宮本　匠（みやもと　たくみ）
博士の専攻分野の名称	博　士（人間科学）
学位記番号	第　25295　号
学位授与年月日	平成24年3月22日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 人間科学研究科人間科学専攻
学位論文名	**災害復興のアクションリサーチ**
論文審査委員	（主査） 教　授　渥美　公秀 （副査） 教　授　中道　正之　　教　授　井村　　修

論文内容の要旨

本論文は、2004年10月23日に発生した新潟県中越地震の災害復興過程におけるアクションリサーチをまとめたものである。中越地震の被災地は、地震以前から過疎化の進む中山間地域であったため、復興にあたりただ地震前に戻すだけでは充分ではないことが容易に想像され、「復興とは何か」という問いを提起することとなった。筆者は、地震半年後から現地を訪れ、集落の復興過程に実際に参与しながら研究を行った。

第1章では、災害復興が問われる背景と現代社会の特質について論じた。初めに、社会科学分野における災害研究の重要性を示し、先行研究を参照しながら、長期的な復興過程に関する研究が希少であったことを指摘した。さらに、災害復興があらためて問われるようになった背景には、現代社会が積極的な善や理想を想定することが困難な相対化の進む時代であることを示すと同時に、災害を通じて人々が経験する相対化され得ない悲しみや喜びが社会構想の契機となり得ることを示した。そして、現代社会における災害復興は、ひとりひとりの被災者やそれぞれの被災地に多様な形で存在し、そのローカルなベターメントはあり得るとして、その実現に向けた災害復興のアクションリサーチを行うことを述べた。

第2章では、本研究のフィールドである新潟県中越地震の背景とその復興過程を紹介した。最初に、歴史的な背景として中越地方の戦後を紹介し、高度経済成長を経る中で、行政に陳情をすることで村の暮らしが便利になっていくという依存関係がつくられていった経緯を示した。次に、中越地震の概要を紹介し、その特徴として、余震が多かったこと、災害関連死が多かったこと、被災地が中山間地域であったこと、地震後に集落が孤立したこと、地震後に豪雪に見舞われたことなどを説明した。次に、地震後に設立された民間の地域復興を支援する中間支援組織である中越復興市民会議の活動を関係者へのインタビューと筆者のエスノグラフィーからまとめた。筆者は、2006年4月から10月と、2008年2月から10月の間、長岡市に居住し、中越復興市民会議のスタッフとして集落支援に関わった。ここでは、当初は明確な役割や活動の目標を持つことが出来なかった中越復興市民会議が、集落支援の現場で模索をしながら、活動を変遷させていった経緯をまとめた。次に、筆者のアクションリサーチの主なフィールドであった川口町木沢集落の復興過程をまとめた。最後に、木沢集落の復興過程に深く関わった大学生らが長岡市の仮設住宅で続けた足湯の活動を紹介し、大学生らが被災地に通うこととなった背景を示した。

第3章では、木沢集落におけるアクションリサーチを通して、災害復興における「目標」について考察した。災害復興において「目標」の共有が大切だと言われるが、過疎高齢化の進む中越地震の被災地では、当初は地域の未来について語ることが困難であった。それが、地域住民の聞き手として受容的に関わる外部支援者の存在を通して、被災者が自分たちの地域や被災体験を語りなおし、少しずつ復興の「目標」が生まれていったことをエスノグラフィーによって示した。そして、復興の「目標」が生まれることを、地域復興の物語を語ることが出来るようになることと位置づけ、語りなおされた地域復興の物語が外部支援者という他者による承認を得ることで効力を持つことを、物語論から論じた。最後に、このような災害復興へのアプローチを、被災者と外部支援者による言説の交流という「ナラティブの協働構築」として位置づけた。

第4章では、複数集落の復興過程として、筆者がその集落支援に関わった25集落26名の被災者への復興曲線インタビューを紹介した。復興曲線インタビューとは、被災者の方に地震から今までの出来事を曲線を描きながら語ってもらう筆者独自のインタビュー手法である。インタビュー結果から、具体的な復興支援につながるものとして、コミュニティ単位での避難生活や、生きがいとしての生業の再建が重要であること、災害以前の歴史にも関心を払う必要があることなどを指摘した。また、第3章で議論した復興における目標の変動が、復興曲線の中では複数の縦軸として位置づけられることを明らかにした。また、復興曲線の中には、その曲線が描かれた時点である「いま・ここ」の「現在」の時点から振り返られた「過去」というよりも、むしろ「こうあってほしい」という「未来」の視点から意味づけられているものがあることを紹介し、災害復興においては、未来についてどのような可能性が感じられているのかも重要であり、そこから潜在的な可能性に着目する「復興感」概念が想定可能であることを論じた。

第5章では、第3章や第4章で紹介したアクションリサーチを再考し、アクションリサーチにおける研究者の役割とその動態を、木沢集落の復興過程における2つの転機を通して、理論的に明らかにした。その際、柳田國男の遠野物語拾遺の説話についての解釈を援用し、われわれの経験の社会的構成が「言語の水準」と「身体の水準」による複層的な構成をとっていること、それが当事者の「個人の内的な世界」と当事者の内属する「共同体の社会構造」の両者に存在していることを述べたうえで、当事者の「身体の水準」に留まっている他者性を回復させることでベターメントを図ることが人間科学のアクションリサーチにおける研究者の役割であり、その二重の複層的な構成をみる「巫女の視点」が人間科学のアクションリサーチにおいて研究者がとる視点であることを論じた。最後に、アクションリサーチにおける研究者は、その実践過程を言語によって回顧的に報告し、次の実践やさらなる共同体のベターメントへつなげていくところまでを射程としていることを指摘した。

論文審査の結果の要旨

本論文では、新潟県中越地震の被災地における災害復興について、アクションリサーチとして関わった成果がまとめられている。災害復興は、これまでの災害研究の中で希少であり、近年、社会的にも高い関心を払われている領域である。アクションリサーチのフィールドとなった新潟県中越地震については、地震の被害の概要と特徴を過不足なくまとめあげ、その後の復興における課題が、災害による被害だけではない、地震以前からの過疎・高齢化も相まった複合的なものであった点を論じている。さらに、川口町木沢集落の復興過程について、その過程に深く参与することで秀逸なエスノグラフィーをまとめている。

木沢集落の復興過程を考察した研究Ⅰでは、将来のことを語ることが困難な中山間地域において、「復興の目標」が聞き手として受容的に関わる外部支援者の存在を通して生成していく様を鮮やかに描写した。そして、「復興の目標」をめぐってなされる一連の言説としてのナラティブを、被災者と外部支援者が協働的に構築していく、ナラティブの協働構築としての災害復興という新しい視点を提示した。

また研究Ⅱで紹介される、災害復興を記述する方法として開発された復興曲線インタビューでは、「復興の目標」が変動していく様子を、被災者の描いた曲線と語りから示して見せた。復興曲線インタビューは、インタビュー手法として非常にオリジナリティーの高いものとして評価することができ、今後の災害研究や実践において更なる貢献が期待できるものである。

最後に、研究Ⅲでは、研究Ⅰ、Ⅱをふまえて、ナラティブの協働構築としての災害復興における研究者の役割を、「言語の水準」と「身体の水準」という経験の社会的構成における複層性から論じた。アクションリサーチにおける研究者の身体性の重要性や、アクションリサーチの過程を当事者と外部者のダイナミックスとして理論的に捉えた点を高く評価することができ、今後のグループ・ダイナミックス研究に大きな可能性を切りひらくものである。

よって、本論文は博士(人間科学)の学位論文として十分価値あるものと認める。